The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狂気な倫理』第III部への論評と質問
Author(s)	檜垣, 立哉
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 68-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94560
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第９回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）
テーマ「狂気な倫理：「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定」

『狂気な倫理』第 III 部への論評と質問

檜垣　立哉

以下に提示する「ハンドアウト」は、大阪大学文学研究科で二〇二三年二月四日におこなわれた、小西真理子・河原梓水編『狂気な倫理―「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定 』（晃洋書房）合評会の際に配布した檜垣のハンドアウトである。ここから再度文章化するのも難しく、また合評会の雰囲気を損なうかともおもい、その場で配布した物を校正し一部補足したものである。ご容赦されたい。

総評

→本書は、小泉義之論集ではないが「小泉義之のエクリチュール」を巡るものとしてとらえる。小泉の仕事への応答になっているかを問題としたい。

→小泉は度しがたいエリート主義者（東京大学の理系に受験し入学するも、文系に再度受験し入学している）であると同時に、常識左翼（度しがたいヒューマニストたち、ようするにコモンセンス＝常識を捨てないひと）に対する徹底的な批判者である。

→小泉の論法はわかりやすい。一見するとまったく荒唐無稽なことをいう（この世の最善説――個人的な記憶では、常識左翼であった奥雅博との応酬がある――、ジェンダー・クィアの常識論を転覆させる、すべての障害者が街中を溢れる社会、すべての子供が産み捨てられて平気な社会、保険セールスマンとしてのハイデガー）。ここには原理論と個別論が含まれるがかなりの主張は無理筋である。つまり実現不可能である（最善説にしても一七世紀議論である）。

→しかし無理筋をパフォーマンスする小泉は重要だ。小泉は「無理筋だということは理解しつつパフォームスしている」（まあ、目立ちたがり屋のオッサンなのだ）。だがこのパフォーマンスは二層ある。

→1）ある真実を露呈する。福祉社会の度しがたさ、ケアの言説のダメさ加減、常識左翼がもつ「常識」への回帰が伝統社会と共犯関係でしかないこと、最終的に「何も解決していない」なかで、問題をたてることで飯を食う（自分の業績を増やし自己満足する）精神医療者、福祉関係者、ケア論者、左翼政治屋、ジェンダー論者の思想の貧困、これらを浮き彫りにさせる。

→2）無理筋の主張はしかし、トンデモ空想でしか描ききれない「本当の」革命の下地をか

いまみせる。科学的社会主義者に対抗する現代の空想社会主義者のようでもある。そもそも「本当の」「革命」など「ありえない」こともわかっている。

ただ一面ではこれは、小泉が批判する福祉主義者と同じ態度（パフォーマンスである）ともいえる。本当の福祉主義も本当の社会主義も実現したことはなく、空想に決まっているので、結局は同じ穴の狢でではないのか。とはいえ「本当のこと」を口にする政治的情動の喚起は「本当のこと」でもある。

→ここから帰結するのは小泉は度しがたいヒューマニストである、ということである。なにしろ「来るべき世界」を口にするのだから。どうして黙っていないのか。それは彼が「メシア」的なものを口にしているという虚偽のパフォーマンスをするという意味で、やはり良き世界を、「常識的」にこの世に少しでも害悪が少なくなることを「逆説的に」願っている「ヒューマニスト」、しかも「度しがたいヒューマニスト」であるからである。

→つまり小泉のパフォーマンスは「良識人ヒューマニスト」を小馬鹿にしつつ、その先をかいまみせながらも、自分自身が「良識人のヒューマニストのアップヴァージョン版」しか示せない構造になっている。これは小泉の言説の矛盾であり、小泉の文章の最良の部分や魅力は、実はこのある種の矛盾を抱えた自己諧謔にある。一種のおふざけとやるせなさにある（怒った顔で本人はそれをごまかしている）。

→しかし、このやるせなさは「芸」の領域だとおもう。読む者にとって重要なのは、この「芸」の意味をすくいとり、自らそれを真似ることなのだ。それだけが小泉を裏切りつつ継ぐということではないか。

→では「無意味で無価値な生」や「狂気」というのは「無意味で無価値」なのか「狂気」なのか。全体総評的にいえばこの本でさほど「無意味で無価値な生」の「狂気」をパフォーマンスしてくれているひとはいなかったとおもう。あるいは意図的にもそれを組みこめているかというと、小泉的な「無意味で無価値な生を無意味で無価値な言説によりパフォーマンスする」までにはいっていないとおもう。

→本書総評

〇一七世紀論、数学論と科学論がないのは端的に不満であった。倫理が主題なのでしかたがないとしても小泉の焚きつけは、一方では一七世紀的な状況を二一世紀にいうことと、科学技術は徹底的に使え、にある。

→編者の小西と河原についてのみ全体言及する。

→小西の DV 依存論での DV にかんする共依存の非暴力者の欲望をあえて論じたてる点は基本的にわかる。これは河原の SM におけるマゾヒスト女性の「欲望」を見ないのはおかしいという議論にも通じている。

→ただし本論考の小西論では、テーマが反出生主義と毒親に限定されている。反出生主義に

ついては、小西の DV 論には「毒」がきえていないか。本当に「なかった」ものが良い、あるいは「誰だって最後はゴミだ」という視点が「胎児」においてのみ特権化されるのは何故か。
→それをいうだけではヒューマニズムそのものだし、もちろんこのヒューマニズムはあまりに理解可能なものであるだけに、反出生主義のもつ「絶望的な毒」にとどいていなくはないか（もちろん産む側の視点から問題をとらえているので、こうなるのは理解できる）。
　また毒親論批判はわかる。だが毒親でない親がいるとしたらみせてほしい。自分は毒親でないという人間が一番の毒親であるのは当然だろう。ただ小泉的にいえば毒親論は、社会経済的な問題（ネオリベラリズム・階層分化）にひっかかるはず。かつての家父長制のもとでは毒親しかいなかったはずで、逆に毒親が問題になることなどありえなかった。あえて毒親トラウマを無視することは重要だとおもうが、それを支える社会経済的な問題圏への視点が必要では。
→河原の SM 論考。古典的な探索として貴重なのは理解できるが、この（少なくともこの論文のかぎりでいえば）吾妻の「戦後民主主義的な」「良きサディズム・マゾヒズム論」への古川のズレと批判は重要におもえるものに、古川の「愛」が行く先の曖昧さが、もう少し決然と示せないか。真性のサディクスともマゾヒストもおり、「愛」と「近代規範」、その揺れを描くだけであれば、結局はポリティカル・コレクトネスのなかで吾妻の「民主主義的な」欺瞞を含んだ SM 論がどうあっても優勢になるはず。現在においても真性のサディストはいるだろう（プーチンかもしれないし金正恩かもしれない）。そして、この世をひっくり返す真性のマゾヒストもいるだろう（ドゥルーズのマゾッホ論をどう読むのか）。そして「戦後民主主義」はどんな言説のなかでも強力である（敵にもなる）とおもう。河原論文は攪乱にはなっても、そこでの「マゾヒストの愛」（まさに小泉的な高次のヒューマニズム）をのべるかぎり、戦後民主主義の枠内におさまってしまうものではないのか。

与えられた講評部分

→以下、基本的には「無意味な生の肯定」と「有用な生の肯定」とは実は表裏一体あるいは紙一重ではないのか（熱烈なヒューマニストとしての小泉）、かくしてそこでは「実現不可能な空想」、それ自身が矛盾するトリッキーなパフォーマンス（小泉風味）が必要ではないのか、それは効いているのか、という観点から質問する。

〇個別論文質問
第三部
・柏崎論考
→『兵士デカルト』の「老人の沈黙」「若者の無関心」を総肯定して看護言説にいかそうという心意気はよし。饒舌な大人（医師・専門家・ケアを論じる連中）、おしゃべりをする若

者（支援者）の対比もうまい。
→ただそれでは、「事態はそう単純ではない」という具体論にいってしまう。もちろん延命治療にかんするあれこれはわかる。制度化批判論に向かうことも実際にはわかるがどうか。ナイチンゲール主義の分析から vital power をもってきても、清水哲郎の「物語としての生」を批判しても、そこでの vital power の議論の先の一展開がほしい。制度化できない・細かな観察では正直素直すぎないか（「物語」は誰にとっても実は強力である）。

・北島論考
→パラリンピックが、障害者自身によって問題視されうるイデオロギーに満ちており、外側からの欺瞞ではなく、障害者自身の抵抗を探るという論点はよい。フーコー的な能動的な権力への服従は確かにあるだろう。ナチス・障害者・健康への思考の同一性を暴くのもわかる（オリンピックも同じだろう）。
→別の生としての二つの「抵抗」。それが自身の努力において「他の障害者を溝に落とすこと」を拒絶することもわかるが、それが制度化的構築への隙間、「別の生」というだけでない転覆にどこでつながるのか。端的にオリンピックも（私からみれば彼らもどこかおかしな身体である）パラリンピックも「成り上がり物語」である。それを壊せるのか。
　ちなみに私はオリンピックをみることは好きなのである。それこそ異形にみえるから。その後の悲惨も分かるから。競馬もそうであるかもしれない。

・田邊論考
　→言語論モデルの下、物理的分子生物学モデルの上という、中間への小泉の非統合的、コネクショニストモデルへの賛意。
　しかしむしろ狂気への賛意は、キャロルにせよアルトーにせよ、どこかで不格好な言語学モデルを必要とするのではないか。それは脳のコネクショナルな理解（ニューロサイエンス）の進展と同じではないのか（小泉の「非言語学的で非表象主義的な心脳同一説」に関連して）。

・笹谷論考
→出生前診断は親自身の遺伝子情報、そして家系、血筋の優生学をさらに明確化し強化するものとして機能している。「子供を産まない」というだけではない広がり。「自発的優生学」への懸念。
→だが、医学が根本的・抜本的に進化したら、障害の可能性をもたない遺伝子などない、ということが明らかにならないか。もちろん病はそれ自身個別的でかつカテゴリー分けされる。論者の分析の意義もわかる。だが生きているというのは、それだけで悲惨に死ぬ可能性

をもっている。障害があってもなくてもそうだし、そもそも細部をみれば自分に障害など「ない」といいきれる人間はいない。そうであるのなら、どんどん「自発的優性学」を極限化すること、誰も何も産まない社会か、逆にどんどん無作為に産む社会を考案しなければダメなのではないか。

（ひがき・たつや）